8A-25
産
172

明治四十一年三月廿一日發行

地主と産業組合

農商務省農務局

203084-000-9
産－172
地主と産業組合
農商務省農務局
M41
EDJ－0026

コ8ㄨ28

充-172

地主と産業組合

時勢の進捗に伴ひ地主と小作人との關係其の他農事上の問題は益々緊切の意義を加へ來れる今日に於て地位あり資力ある地主の之を傍觀するを許さざるは多言を俟たずして明なるに全國幾多の地主中奮起努力する者未だ稀なるの現狀なるは深く遺憾とする所なり

明治四十一年二月新潟縣大地主等關西地方の模範的事業を視察し得たる結果を以て大に北越の農事啓發に力を致さんが爲め大擧して上京せるは實に好事とす農商務大臣は一行に懇篤なる訓諭を與へられ又大日本産業組合中央會々頭平田男爵、副會頭加納子爵の談話あり加ふるに兵庫縣大地主貴族院議員伊藤長次郎氏の實驗談ありて切に一行に期待する所ありたり玆に以上の說話を集錄して廣く之を頒布し以て全國地主の奮起を希望す

新潟縣大地主一行總數　四二人

内　地主　三三（地主中ニハ産業組合又ハ産業組合ニ從事スル者ヲ含ム）

官公吏　九

新聞記者　一

一行ノ日程大要

同　十日未明　東京着

同　當間　農商務省特許品陳列館視察、内務大臣官邸ニ於テ同大臣ノ訓辭、農務局官吏

同　夜間　品評列館視察、農商務大臣ノ訓辭

同　十一日　當間　大日本産業組合中央會懇話會

同　夜間　農務大學視察

同　夜間　雜穀會

同　十二日　農商務省農事試驗場及産業講習所視察

同　十四日　東京發

以後　陸路　岡山縣下、愛知縣下及兵庫縣下ノ視察

同　十八日　視察ヲ終ヘ兵庫縣下ニテ解散シ歸途諸地ヲ視察シ歸郷

○目　次

松岡農商務大臣演說要領……一頁

（大地主諸君に望む）

大日本産業組合中央會會頭平田男爵演說……九頁

（敎育勅語と産業組合の精神）

貴族院議員伊藤長次郎君演說……二三頁

（地主の本領及事業）

大日本産業組合中央會副會頭加納子爵演說……四九頁

（産業組合に關する雜感）

松岡農商務大臣演說要領

大地主諸君に望む)

今日の諸君の旅行は機宜に適し農政上甚だ有益なる擧として予の深く喜ぶ所なり凡そ人は常に同じ事物のみを見居る時は遂にそれに慣れその事が最良の樣に思ひ做すものなり故に時々異りたる地方に出で新しき事物を視察しその宜しきは採て以て他山の石とし自ら顧みて之れに習ふ所あるは緊要の事に屬す

今日[illegible]後經營の秋に當り國家は多大の國債を負ひ一方戰爭に疲れし海陸の軍備は之れを補充し之れを復舊せざる可からずこゝに於てか增稅又止むを得ざるなり我國民は世界に戰勝の大名譽を博し得たる一方にはこの負擔にも應せざる可らず既に國民にこの大負擔あり宜しく各自奮勵一番產業の發達國富の增殖に奮勵する所ある可らずして可ならんやこの際諸君が我國產業上殊に重要なる農事改良の事に銳意努力せらるその勞や多とすべきなり

予客年越後に到り新潟に於て一夕諸君等に語る所ありたりその中に「新潟縣は一縣の產米二百五十萬石に上れるの故を以て大いに米產國として他に誇れり然れ雖予をして云はしむれば縣下は土

埴潤に人口亦多し故に土地人口と米の產額とを比較して他府縣に對せんか敢て誇るに足らずとせんのみ然れども幸に縣下には斯く廣濶なる良田の在る有りもし之れに一層の改良法を施せば增收の望も從て大なるものあるべし」と予は此席に於いて再び之れを繰返さんと欲す又その際縣下に於て二三箇所の排水設備、耕地整理の實況を視或は之れを實地に行へる人が予にその効果の大なるを語りしことなかりて深く喜びとしたる所なりき斯樣に多少の勞力と費用とを加ふる時は多大の利益は顯はれ來るなりもし之れを全縣下に廣く及ぼさんか今日二百五十萬石の米の產額は必ずやその倍數を增すに至るべし

予思へらく新潟縣は全國に勝れて農事の改良事業等の行はれ易き處なると同時にもしその途を誤れば甚だ難き所以の事情ありと然らば何が故に農事改良事業等行はれ易きかと云ふに越後は由來諸君の如き大地主の多き所なり由つてその大地主たる諸君が一度奮て小農民小作者の先頭に立ち農事改良の鼓を鳴らさんか小農民はその響に應じて歩調を一にしてその効果は忽ちに揚るべきなり實際大地主が先に立ちてその爲に改良事業の効果顯著なりしは各地その事例に乏しからず之れは更に後に述べん兎に角大地主は軍隊に於ける將校の如し軍隊の訓練宜しきと否とはその將校の指揮如何に因るが如く小農の農事に奮勵するとせざるとは一つに懸りてその幹部たる諸君大地主の双

肩に懸かる大地主たるその地方に於て智識ある資產ある富み且德望ある人多きを以てそれ等の人の輩はそぞろに小農者をして歸伏せしめ得べきなり農事の改良が是等の人によりて稱へらるればその行はるるや誠に湯沸かるるが如し[illegible]

然るに新潟縣下に於いて從來農事改良上の好例が他に拔ぐるものあるを聞かざりしは如何或は疑ふ大地主たる諸君は祖先傳來の資產を以て敢て不足を感ぜず從て農事の改良等は單に小作人を益するのみにして地主にはさして利益ある事にあらず等の說を懷き居られしが爲めはおもふるに果して然りとすれば新潟縣の如き大地主の多き地方に於ては反て農事の改良等は行はれ難くして事の同程度の農家多き地に於てその事行はれ易しと云はざる可からず故に大地主多き土地に於ては農事の改良行はるゝ事易きと同時にその地主にこの心なくんば反て大いに阻害せらるるを免れざるなり

今こゝに耕地整理を行ひそれによりて水旱の憂を減じ收穫は確實となり作業に勞費を省き從て利益從來より多くなれる土地ありとせんか小作人は喜んで之れを耕作すべく小作米の不納或は減少の請求は爲に跡を絶つに至り小作人が利益を受くると同時に地主も安心して且つその利益を均分する事を得べき事必せり殊に今日の如く各種の事業勃興し來れるに際しては若し地主にして小作人

の利益を度外視し農事の改良に意を用ゐざらんか誰か好んで利益薄き農地を小作せんや遂には田畑を離れて他の事業に移る者起り來る憂なしとせず此故に地主が農事改良の主唱者となるは畢竟するに小作人の爲たり又自己の爲たるなり

次ぎに前に云へる大地主の主唱ありしが爲容易に農事改良上の美果を收めたる實蹟の二三を紹介せん

酒田の本間家と云はゞ我國に名だゝる大地主たるが久しき以前より農業の技術者を聘して乾田馬耕を小作人に奬勵し近年に至りては更に自家の所有地に耕地整理を初むる等鋭意農事の改良に盡したる爲今や庄内地方の農業は當來の面目を一新するに至りたり又兵庫縣の大地主伊藤長次郎氏は現に貴族院議員たる人にして未だ年少の人なるにも拘らず夙にその地方に農事の改良を稱導し或は耕地整理を爲してその模範を示し或は模範果樹園を設け或は伊藤家農會伊藤家小作人信用組合を立つる等各種の方面に盡力して農民の啓發に勉められその効果は頗る觀るべきものあり諸君は之れより兵庫縣に行かるゝ由なれば同地に於ては此の事業を親しく目擊して必ず得る所少からざるべきを信ず

愛知縣の岩田吉兵衛氏も亦地方の篤志家なるがその地に廣き濕田あり年々の收穫意の如くならざるを憂ひ氏は率先して耕地整理事業を發起せしに大地主たり且つは德望ある氏の一言は千斤の重よりも重く敢て異議を挾むものなく昨年その計畫なり廣袤二千町歩の地域今當に工事着々として進行し居れり

又同縣海西郡の大實氏は獨立の經營を以て數十町歩の地に排水工事を完成して甚だ良好なる結果を得たるがその傍には千六百町歩の一區に規模大なる喞筒排水の好成績を擧げつゝあるものあり

排水の事に就ては新潟縣の耕地整理は十中八九迄は排水事業を行へるを以て諸君も定めし御承知ならん予は昨年新潟に至りし際もその地の人より「本縣に於ては排水の爲に關係地主の間に訟訴起れり古來我田引水といふ事あるも當地にてはその反對に我田排水の爭あり」との談話を聞きし事あり斯樣に新潟縣に於ては特に排水事業は農事改良上重大の關係をもち居れるを以て諸君は愛知縣に於てこの事に付留意視察せられん事を希望す

灌漑事業を行ひて好結果を得し一例は愛知縣の碧海郡新川町に在りそは三十幾尺の高さに水を揚げ從來稗、粟等の畑作に甘せし地を一變して米作に適する田に化せし事にして昨年秋にはその收穫米を本省に提出し來れり

其他東京附近に於ても利根川、江戸川の沿岸には諸所機械排水を爲して好結果を占め居る所あり
又茨城縣稻敷郡源清田村の北島氏の首唱によりて成れる土地改良の如きも亦成功せる好例なり初め氏の事を企つるや反對の聲多かりしも氏は百難に屈せず之れを成就せしめたりその効果は連年殆んど皆無作たりし地が毎年豐穣の收穫を得るに至り永く農民の喜となりたり
蓋し上の如く土地改良の事業はその効果著しきを以て今日に於ては既成の事實に鑑みて人々その利益を認め當局者の勸誘の勢大ひに省くるに至れり猶整理地の面積の如きも次第に大規模となるの傾向を示し數千町歩の地區に之れを行ふもの續出する有樣なり斯く數年前と大ひに事情を異にし耕地整理事業の實行容易なるに至れるの際諸君の如き有力者が起つて農民を指揮せらるゝに於ては事の成る決して難からざるべし此度の旅行中特にこの點に付充分の注意を拂はれたしもし他の長を參考として實地に之れを應用せらるゝに於ては國家の爲に利益する所多かるべきを信ず予は切にこの旅行の目的が他日種々の事業となりて達せらるゝの日あるべきを期待す[illegible]
尚一言申述べんとするは今日の時勢に於ては單に畑を田にし濕田を乾田とし或は作物の改良をなすのみにては未だ充分なりとは言ひ難し因て諸君に望まんとする所當地に滞在の日を正味日間延引し本省の主管に屬せる亞子の農事試驗場と蠶業講習所と深川にある工業試驗所と水産講習所及

目黒の林業試驗所等何れも市の近郊にあるを以て觀覽せられん事なり
今日は水産事業も漸々進歩し來り從來の如く沿海に漁するに止まらず日本海を渡りて對岸の沿海洲に出で更に遠くはオコツク海に船を泛ぶるものあるに至れり故に漁業の組織も大規模とせざるべからず諸君の中には恐くは海岸に近き人もあらん又水産業の上に趣味を持たるゝ人もあらんそれ等の人々は宜しく資本をこの種の事業に投下し國富の增殖を圖られ度きものなり又養蠶に就いては或は諸君の意に觸れんも新潟縣は未だ幼稚と云はざる可ず而かも桑園とするの土地は決して少きにあらずさればこの事に付ても諸君に希望なき能はず又山林事業も各地年々發達し來り且つ交通の便開けし爲木材は滿韓遠きは濠洲に輸出せられ堅き材質のものは歐洲に迄販路を擴くるに至りその價額も少からざる額に達せり依て山地多き地方の人々は山林上の參考の爲林業試驗所の視察をせらるゝを望む獨是等産物に對してのみならず一歩を進めては之れに人工を加ふる事即ち工業の方面にも留意せられたくこの爲には工事試驗所を一覽せられん事を奬むる次第なり依て是非數日間此地に足を留め是等各種の機關を巡覽せられなば蓋し諸君を稗益する所少からざるべし

大日本産業組合中央會會頭

男爵平田東助君演說

(教育勅語と産業組合の精神)

閣下及諸君、此度皆樣は遠路の御旅行で、御疲の中にも拘はらず御來會下されまして、吾々一同最も本懷に存じます、一昨年新潟縣に罷出ました際、定めて今日御出席の諸君中にも御目に掛つた方もあると考へますが、其節は誠に厚き御待遇を受けまして、感謝の至りに堪へぬ次第でございます、其當時は恰も新潟縣に支會を設けられまして、爾來寔に日尚ほ淺いのでありますけれども、諸君の御熱心なる御配慮に依つて組合の數も殖えて參り、其事業も段々發達して參りつゝあるので、誠に喜んで居る次第でございます、此度諸君は靜岡縣より愛知其他の諸縣を經て兵庫迄御いでになるに就て、農業上に關する諸般の設備も御覽になることであろうし、又吾々が關係して居る所の産業組合に就ても、御視察になることだらうと思ひますに就きましては、今夕は簡單に私の平生思考する所の概要を擧げて御話を致しまして、聊か御參考の一端にも供したいと考へる次第でございます

此間樞密顧問官高崎男爵の來訪を得ましたが、同男爵が見へましてのお話に、自分は豫て教育勅語の事に就てどうか國民一般に此御趣旨を知らせたいと云ふことを思ふて居つた、今日は各學校に於て皆生徒は之を奉讀して居る譯だが去りながら尚ほ之を推し擴めて上下一般に眷々服膺しなければならぬ次第であるから、依つて今回一の勅語會を設けて、京都に其本部を置いて東京に支部を置くことにした、さうして其名を「咸其德」と云ふ勅語の御趣意を採つて「咸德會」と名けた、實は斯う云ふやうな考へであるから、君は產業組合の事は就て始終やつて居るに就ては、どうか產業組合の上にも此御趣旨を普及させてはどうであらうかと考へたので相談に來たが、どんなものであらうかと云ふことでありました、私は最も熱心に之に贊成を表し、如何にも御尤もで、此の勅語は教育に對して詔らせ給ひたるものであるが其御趣旨の在る所を考へれば、御話の如く苟も國民たる者の守らなければならぬ事柄は總て其中に備つてゐるので、吾々國民は一日も忘れてはならない所のものである、從つて我產業組合に於ても此御趣旨を遵奉し、之を標準として行くべきことは、最も必要のことであらうと考へる、是に就ては滿腹の同情を以て御嘶を承ると云ふことを答へた次第であります、

偖教育勅語の事に就ては諸君も御承知の如く菊池大麓君は英國から招待を受けて彼方に參つて、之を英語に飜譯して講話をされた處、非常に大歡迎を得て、其當時新聞などには澤山な記事を掲げて、さあのやうなことであるから是等は皆さん御承知のことでありませうが、菊池男爵に此間面會して聞きましたことでありますが、當時英國の文部大臣の言はれるには、之は誠に結構なものである、之は自分の方の學校にも推擴めたいものと考へるから、之を澤山印刷して、各視學官に頒ちたいと云ふことであつたさうである、此視學官と云ふ者は殆ど四百人も居りますさうでロンドンには百五十人も視學官が居るさうであります、英國に於ても勅語には熱誠を注いで歡迎して居るものと見へるが、如何にも斯くあるべきことであります、彼の勅語に「之を中外に施して悖らず」と仰せられてありますが、果して之を中外に施して悖らぬので、英國に於ても之に則つて以て其御趣旨を彼の國の學校にまで推擴めやうと云ふ考を彼の國の人が持つて居ると云ふことは、誠に有難いものであると思ひます、此教育勅語は私から思ひますると、如何にも之は教育上に於ての勅語に違いございませぬけれども、併しながらその御趣旨を能く玩味し來り、其中に在る所の事柄に就て克く考究すると、之は取りも直さず我產業組合に於ても精神骨髓として日常遵奉すべき所の御訓示であると思ふのであります、

私は此の頃又是れに就いて島根縣の事務官本間と云ふ人から一の美談を聞きましたから、是れ亦

序に御話して見やうと思ひます、それは島根縣の鹿足郡に青原村と云ふ村があります、此の村に幸田虎太郎と云ふ小學校の校長が居るさうで、此の人は二十五年間同一の學校に奉職を致して居つて、洵に篤實溫厚にして且つ熱誠な人であるさうであります、此の人は二十五年も校長として奉職して居るのであるから、其の村の子弟四十歳以下の男女は悉く其の人の薫陶を受けた者で、今は皆戸主又は主婦となつて働いて居る、又其の村長も極めて篤實な人であつて、此校長を輔けて、ともに村の治蹟に盡して居ると云ふことであります、此の村では青年が卒業生會と云ふものを拵へて、校長幸田の薫陶を受けた所の生徒が、男女とも皆之れに加入して居る、そこで毎朝起きると先づ口嗽手水をして身を清め直に勅語を朗讀する、此勅語を朗讀しなければ話も爲さなければ御飯も喰べないといふ譯であります、必ず先づ勅語を朗讀して然る後今日の業務に取掛かるのであります、此村では斯樣なことをやつて居る位だから、又從つていろ〳〵の事業をやつて居ります、試に其事柄の概要を御話しますると、日曜日又は其他の休日を利用して青年が一緒に作業をする、例へば草鞋を造れば此草鞋を共同販賣をするので、之を販賣すると云ふても別段に店がある譯ではありませぬ、村の或る所に持つて行つて大道に之を掛けて置く、さうして其側に錢箱が置いてある、そこで入用のある者は其草鞋に對する定價を箱に入れて各自由に取つて穿いて行くと云ふことになつて居る、之は斯の如く共同作業をして共同と云ふことの精神と公共同愛の心とを養成して、是を以て村の者の德性を養ふと云ふことの考から起つたものと見へる、そのから別段に見世を設けて商賣に草鞋を賣ると云ふ譯ではない、構はず大道に懸けて置くと云ふ譯であるさうであります、それから田を植ゑるとか或は草を採るとか云ふやうな農事の期節になると云ふと校長が出て來て、是は斯うやる方が宜い、あれは斯うするが宜いと云ふ風に講話を先づ以てする、それから今の卒業生は別に又土地を借受けてそれで試作をする、此試作に就ても始めは老人ともは、あんなやり方では仕方がない、どうも若い奴等には困つたもんだ、どうも年取つた者の云ふことを聞かぬ、實驗と云ふことを知らぬから困ると云ふて非常な反對があつた、所が段々青年がやつて行く所の結果が如何にも宜い、青年等のやつた方は自分等のよりも能く出來る、仕舞には老人ども、甲を脱いで如何にも其方が宜いと云ふことになつて、今日は其方に從つて昔のやり方の惡い所は捨て新しい方に改めたと云ふことである又斯樣に試作をした所の物を集めて品評會をやつて互に相はげむから自然に農事は改良する、それから公共の事業、例へば河を浚ふとか、海を浚ふとか或は道路を作るとか云ふ公共事業はどうするかと云ふと、青年が一致して働いて醵金をする、又學校も大分古くなつて造り直す事になつたに就ては、貯金をしなければならぬ

と云ふので、米麥小豆蕎麥と云ふやうな物を作つて、それを持集まつて共同販賣をなし、それを皆積んで置くことにして今は餘程の資金が出來て居ると云ふことであります、それから、村の基本財産とするが爲めに植林をやつて居る、又文庫を置いてある、文庫と云ふても村のことでありますから立派ではありませぬが兎に角文庫も設けてある、此村には滯納者と云ふ者は數年間更にない、又罪を犯すと云ふやうな者は一人もない、今日では眞に立派な模範村であるけれども、惜むらくは未だ其村の基本金が足らないさうであるので、是だけが一つの缺點であると云ふことであります、今御話を致す所はほんの概略でありますが、如何にも立派な村のやうに考へます、殊に朝農事に掛かる前に於て必ず教育勅語を朗讀しなければ何事もしないと云ふことは、他にもあるかは知りませぬが、是は珍しい逸事として聞いたことであります

偖吾々の主張する產業組合は如何なる者であるかと云ふと、產業組合は其外から見た時に當つては一つの經濟團體に外ならぬ、是は少資本なる生產者の困つて居る人々が多勢の力を集めて互に救濟をする、救つてやらうと云ふても一人の力では救ふ途がないから多數の人の力を集めて相互に助け合ふが爲に共同したる所の一つの團體である、でありますけれども今度は之を內の方から見て、之はどう云ふ目的から成立つて居るかと云へば、之は社會を救はんとする爲めに起す所の

一つの道具立である、今日の社會はどうしたら救い得るかと云ふことから起す所の一つの設計である、又社會の教育を爲さんとする爲めに起す所の一つの道具立である、學校で教育を受けても此教育ばかりではいかぬ、社會に立つて行くことになると、色々な社會の事物に當る毎に種々なる妨げが起る、種々なる事柄が起つて來るが、それに對して進んで行く所の教育、即ち社會的に教育して行かふと云ふ所の目的を以て起る所の一つの團體である、父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及ぼし智能を啓發し德器を成就し進んで公益を廣め世務を開きあつぱれ一家の自治と一村の自治とを成し遂げて國家の良民たらしめんとする學校である。此二つの目的は即ち產業組合の起る精神であります、前に御話する所の多勢集まつて資本の足らないのをどうか貰いでやらうとか、物を共同して賣らうとか買はふとか、共同して物を造らうとか云ふことは、此目的を達する上の一つの手段であります、又方法であります、今日の資產の乏しい者を救濟しやうと云ふことの爲めに施す所の手段及方法は、是はいろ〳〵ありませう、決して獨り產業組合ばかりでない、でありますけれども去りながら、今日の社會に對して最も適切に且つ最も近道は何であるかと云ふと、吾々は即ち產業組合であると信ずるのであります

何故に此產業組合は今日の社會に向つて之を救濟するに最も適切であらう、最も近道であろうか

と云ふことに就ては、私は此産業組合はどんな譯で出來たものであるかと云ふことを茲に御話することが必要であると考へます、成べく是は簡單に御話をしやうと思ひますが、此産業組合は元歐羅巴に起つたので、即ち獨逸に起つたのであります、其起つたのは今より凡そ六十年前頃から起つて來て、盛になつたのは四十年此方のことである、千七百年の中頃迄は歐羅巴に於ても未だ農業主義で決して今日のやうな工業が起つて居つたのでない、然るに千七百年の末頃から御承知の如く蒸氣の發明が起り其他いろ〳〵の發明が起つて來て、又是に從つて段々機械と云ふ物が出來て來た、此機械が出來てから時を省き勞力を省き費用を省くと云ふことになつたから、茲に於て今日の經濟の變遷が起つて來た、偖此器械を造るには相當な資本が要る、資本がなければそれだけの時も費用も勞力も省けない、從て資本の多い者にはとても競爭が出來ないから是が爲めに資本ある者は益々富み、資本のない者は益々貧くならなければならぬと云ふことが起つて來た、斯くの如き工業の興るのは必ず先づ都會に起る、都會に起るのは生産物品の販路などの關係があるからで、必ず都會に興るのであります、さうすると地方に於ける農民は自然都會に集まつて來る、今日百姓をして居るより勞働を以て生活し、工業者になつて居る方が利益だと云ふので地方の人が皆都會に集まる、其結果として段々地方に於ける勞力が缺乏して來た、斯樣なことになると、土地の所有者は、勞力の賃銀が非常に高くなつて來たので甚だ困ることになつた、さうして一方には經濟に大變遷が起つて來た、偖變遷が起ると云ふと社會は何時迄も安寧には行かない、いろ〳〵なる事が起つて來る、同盟罷業も起つて來ればいろ〳〵の變動が起ると云ふことは、それから生ずる自然の結果である、又今迄は大勢の人が俱に共に國家の租稅村の租稅を負擔して居つたのが、それ等が段々減つて來るからとう〳〵それを獨り資産者の肩中に負はなければならぬと云ふことになつて來た、是も亦自然の結果である、此御話をすると云ふと、歷史が長いので時間がありませぬから、是は省いて置きますが、概括の御話をするとさう云ふ形勢になつて來た、さうなると獨り小作者又は勞働者が困るのみならず、是が爲めに勢其弊を受ける所の者は亦資産者であります、茲に於て資産なき者は勿論資産ある者も共にどうしたものだらうと考へるやうになつた、又政治家も學者も何か名法はあるまいかといろ〳〵頭を腦まして方法を考へたが、偖如何せん名法はない、併しながら何しろ是は救濟せぬければならぬので、教育家や宗教家か骨を折つて金を募つてやつて見たが、そんな金は直ぐ無くなる、とても長くは續かない、それでは到底救濟の目的を永久に達することは出來ない、此時に於て考へたのは、是はどうも仕方がない、各自ら救ふと云ふ精神を養ふより外に仕方がない即ち自治自助に基て共同の力に由るといふ考か抑々

産業組合起源の發端で、之が卵となつてそれから段々發達をして初めて獨逸に今日の産業組合が出來て來た、是が即ち御承知の如く我國にも移して以て三十三年の法律となつたのであります、我が國の組合は二十五六年ころから起たもので爾來日を經ること淺いけれども、今日は兎も角も三千四百餘の組合があり此組合に使用して居る所の資本が千五百萬圓位になつて居りませう、歐羅巴などに比較しますれば實に僅々たるものであるけれども、我國經濟の今日の狀態から見れば隨分速かなる進歩と申してよからうと思ひます、併しながら今日はまだ〳〵ほんの序幕であつて是から大に發達を期さなければならないのでありますが、兎も角もこゝ迄には至つたのである、偖此組合が起て以來今日で十有余年になりますが、今日は最早歐羅巴の飜譯的組合でないゝ、元來飜譯は面白くない、國民に適應した國民の性情に適ふた制度でなければ良い制度ではない、又永遠に便益を享け能ふものではない、故に此組合も獨逸の飜譯ではいけない、日本の組合になならなければならぬと信じて疑はないのでありますが、段々地方の狀況を視察すると、最早獨逸の組合ではない、立派に日本に適應した組合が出來て居るのであります、又先刻來も御話致す通り組合の形こそ一つの經濟的團體でありますが、其目的精神は國家の良民を作り擧げようとする社會の救濟機關たるのである、我國には古來よりの國民の歴史を有し、國民の道德を有し、況や畏くも教育勅語がある、「斯の道は實に我皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の倶に遵守すべき所之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず朕爾臣民と倶に眷々服膺して咸其德を一に歸せんことを庶幾ふ」と仰せられてある、私はどうか此精神を以て組合を發達させて行きたいものであると冀ふのでありますが、之は勿論申迄もなく諸君に於ても御同感のことゝ考へます、

私は此間或る獨逸の雜誌を讀んで居ました處、斯んな事があり申した、それは電信柱でありますが、日本でも樹を使つて居りますが、今は中々高くなつて來て、大きな木になると一本百圓もすると云ふことださうであります、所が獨逸は非常に樹の少ない所で、電信柱に困るさうで、電信柱と言へば眞ッ直な木を使つて居るやうに思はれますが、彼方では曲りくねつた木で幾何でも構はず使つて居るさうでありますが、それでも尙ほ困る所から鐵は丈夫であるし又便利であるから鐵の柱が宜からうと云ふことになつた、所が鐵は電流を多分に吸取つてしまふから非常に電流を要する上に之を保存して行くには始終塗つて居らねば錆でしまふからなか〳〵手がかゝつてどうも鐵もいけない、そこで段々考へた末獨逸のカッセルと云ふ所で硝子の電信柱を發明して、之を此間彼方の電信郵便局で試驗した所が大層好い結果だつたさうで專賣特許を得て總て電信柱を之に取換べやうと云ふことであります、其所に尙ほ附記してあるのは、之は熱帶地方には最も良い、

熱帯地方の電信柱には實に困るものである、それはなぜかと云ふと猛獣が澤山居るので是等が柱を倒す、それから年中蟲が居る、蟻其外木を害する蟲が始終柱を喰ふ、之が爲めに仕末にいけないので往々立木を其まゝ使つて居る、彼の比律賓あたりは今でも立木でやつて居るのださうだ、で此碍子の電信柱が出來たことならば將來熱帯地方に便であらうと云ふことを書いてあつたのを讀んだことがある、斯樣に工業が駸々として進んで行くので、何處迄行つたことなら向ふの岸であらうか分らない程である、斯う云ふ譯であります、吾々が後から追駈けて行くのは實に大變である、併しながら追付かなければ吾々は一緒に歩いて行くことは出來ぬからどうしても追付かなければならぬ、それなら之に追付くにはどうするかと云ふ問題が起るが、今日は先づ小を積んで遂に大を爲すより仕方がない、そんなら小を積むの途はどうするかと云ふ問題になるが、私は前言を繰返して、此產業組合が最も其近路であると諸君に御話をする所以であります、諸君は今回遠路御視察に御出掛けになりましたが、是から種々の事業を御視察になつて、他日御歸縣になつたことなれば、それ等の長を取り短を捨て、他日新潟縣に於ては、吾々が活目して見る所の事業も定めし興るであらうと期待されるので、今日から吾々は喜んで居る次第であります、是は單り新潟縣の小作者の幸のみでなくして、取りも直さず諸君の幸、之を大きく申すと國家の幸であると思ふ、今度各地を御視察になりまするに就て、既に御覽にならうと云ふ御豫定になつて居るさうでありますが、此處に即ち御列席になつて居られます所の伊藤長次郎君は、現今貴族院に在つて吾々の同僚でありますが、多年自分の小作者に向つて、熱誠に之を薫陶せられて其農事上の經營に就ては至れり盡せりと私は思ふのであります、同君が今やつて居られまする所の事業に就き、並に其御意見等に就ては此後に諸君に御參考として御話がある筈でございますから、充分御聽取りを願ひます、其後に於て加納子爵からも御話がある筈でございますで、是亦子爵の多年御經驗のある所を篤と御聽取りを願ひたい、尙ほ餘寒も甚しいことでありますで、今度御視察の道に御上りになるに就ては、御道中充分の御愛護あらんことを希望致します、

貴族院議員

伊藤長次郎君演説

（地主の本領及事業）

閣下並に諸君、先刻平田閣下より御紹介によりまして、何か御話を申上げまする都合でございまするが、先刻農商務省の方で一言皆さんに御挨拶を申しましたから、もう餘計な御挨拶は今晩は略しまして、直に本論に入らうと思ひます、で今晩御話を致しまする要旨は農事改良の方面に於て、自分が施設をして居ります組織に就て御話を申上げます次第でございますが、併し唯斯う云ふことをして居る、あア云ふ事をして居ると云ふ、其事實だけ申上げるよりは、少く遡りまして自分が斯う云ふ事をやり、あア云ふ事をやつて居るのと云ふものは、斯う云ふ立場からして自分はやつて居ると云ふ、斯ふ云ふ理想の下に自分は斯う云ふ事をやつて居ると云ふ、詰り多少精神的の意味合を、此事業の施設に就て申上げまする以前に前提として申上げまするのが、寧ろ便利であらうと思ひますから、其事から先に申します、で尤も御見掛けの通り私はまだ若い者であります、貴族院中でも最年少者でありますから口の端に乳臭のある者であります、それでまだ高

事研究中でありますのでありますから、或は議論に亘るやうなことがあるかも知れませぬ、お聽きやうに依りますと、何か青二才が自慢話をするやうに思はれるかと思ひますが、唯私の精神的に思ふて居ります所を、詰り隱しもせず又飾りもしなければ憶面なく露骨に私の信ずる所を諸君に申しますのでありますから、其お積りでお聽取りを賴ひます

私は今三十六歳であります、十一歳にして不幸にして母を失ひ、二十三の年に父に別れたのであります、併しもう私の二十の年から父は病氣でありましたから、殆ど二十の年から家を相續したやうな次第であります、で二十三にしまして父を失つた者でありますから、此家を相續して行く、家を護るに付ては如何にしたら此家が安全に繼續して行くであらうか、と云ふ家を護る、世の中に處すると云ふことに就て、如何にすれば自分の家は安全で、自分の身が幸福であらうかと云ふことを研究しますのが私の處世の第一着歩として研究しなければならぬ問題であつたのです、で詰り自分が家に對する觀念を研究した譯であります、丁度其頃文學博士の井上哲次郎さんが書かれました敎育勅語衍義と云ふ書物が發行になつた時であります、丁度先刻も平田男爵から敎育勅語のお話がありましたが、其勅語の井上博士の衍義を見ますと、其衍義の中に書いてありますのには、勅語の初に「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニシテ德ヲ樹ルコト深厚ナリ云々」と云ふお言葉がありますが、其御言葉を解釋された中に、どうも此國家と云ふものは永久のものである、永久の國家と云ふものは、祖先がいろ〳〵國の爲めに盡したものを今代の人が承繼いで、さうして今人が又其子孫へ讓るのである、で祖先と現在と未來と云ふものは、連綿として之が渝らぬのである、茲に於て國家と云ふ者は永久に發達すべきものである、で之を家に喩へて言ふと、先祖と云ふものがあつて、さうして家の主人が祖先から承繼いだものを、子孫に又之を讓ると云ふので、始めて家と云ふ者は安全にして家も相續が出來るのである、今の言葉で之を言換へると、日本は家族制度である、家族制度に依つて始めて國家も安全であり家も永久安全に行けるべきものである、之を阿米利加で見れば、非常に個人主義が盛であつて、人は殆ど一代で身上を拵へる者もあれば、一代で身上は社會の事業に擲つてしまふ者もある、家と云ふものが社會の本位でなくして人と云ふ者が社會の本位である、併しながら我國は家族制度の國であつて、個人でなくして家と云ふものが社會の本位である、茲に於て我國に於ては家に對する觀念は一層深く、家族制度と云ふもので行かなければならぬ、國家が何時迄も連綿として、我國が連綿として且つ家が永續をせねければならぬ、斯う云ふ理屈が書いてありましたのでございましたから私も大に發明した、自分が家を相續したに就ては、自分は勝手なことをしてはならぬ、祖先に對し子孫に對する所の義務を負ふて

居るのであるから、家憲を守り其家法を大事にして、子孫に安全に譲らぬければならぬ、所謂祖先に對し子孫に對する義務を深く自分は感じたのであります、それで祖先を大事にし家名を失墜しないやうにしなければならぬ、それをするには自分の一身を守り一家を齊へ、さうして自分だけの事を思はぬやうにしなければならぬと云ふ考からしまして、之を財産を護ると云ふ上から考へても、百萬圓の金を譲つて貰つた此百萬圓の金は自分の私有物でない、家の財産であるから此財産には相當の利子を付けて、之を再び子孫に譲らなければならぬものである、例へば農業の上で言ひますれば、百町なら百町の田地を親から相續をしたとすれば、其利益のみを自分が貰つて、親の脛囓りでは親に對する義務は立たぬ、親から貰つて居る所の田地に對しては相當の改良を圖つて、親に對する義務を盡し、併せて其改良の結果を子孫に譲ることにせぬければ祖先に對し子孫に對する道でないと云ふ考を、實は私は家を相續しました際に考へました、即ち自分の家に對する觀念、祖先に對し子孫に對する考をさう云ふ風に持つて、それを以て世の中に處する一つの根據と思ふて居るのであります、之がどうしても自分が世の中に生れて來た自分の一つの義務である、之はもうどうしても此立場を失つてはならぬと深く信じたのであります、さうして此觀念を本として段々やつて參りましたが、別に失策も致しませぬ、二十七八年戰役後に餘程經濟界も變動を來しましたが、幸にして失敗も致しませぬ、まアどうやら斯うやら親の脛を囓つて參つた、所でそれから遂に一つの又疑問が起つた、それはどう云ふ疑問であるかと云ふと、自分を家と對する觀念は形作られ多少自分も安心を得ましたが、それなら人が個人として世に立つと云ふ場合に、己のみが成功をすると云ふことで、それで果して人間の本分が盡されたものであらうか、自分それから家と云ふものと社會と云ふものとの關係はどう云ふものであらうかと云ふことを今度は考へ出したのです、まア之が二十七八か三十歳前後に此問題を解決すべく研究をしたやうなことであります、自分と家と社會と云ふものとの關係に就て考へると、自分が唯家を護り祖先に對し子孫に對するだけの事をやつて、自分だけの成功はそれで宜いが、自分と社會との干係はどうかと云ふことになると、是はどうも人間として唯自分の家のみ護りさへすれば宜いと云ふことのみではどうしてもいかぬ、社會と云ふものは共同生活でありますから、例へば地主として小作人から米を持つて來る、持つて來るに就ては小作料をやつて居る、小作料をやつては居るけれども、小作人あるが爲めに地主が立ち行くと云ふことになると、小作人あるが爲めに地主が立ち行ける譯になるし、自分の着て居る着物を見ても菓子を見ても蜜柑を見ても、吾々にさう云ふ物を供給して居るのは共同生活であるからで、共同生活である爲めに吾々は自分の位地を保つこと

が出來るのであると云ふことを非常に感じた、所謂天の惠があれば地の惠もあるし、又人間相互の共同生活から吾々は非常なる恩惠を得て居るに違ひない、吾々が鳥渡車に乘つて十錢の車賃を拂つても、それで其場は濟む譯でありますが、併し其車挽の事を考へると、僅か十錢の金で車を挽いて居る者であると思へば、金はやりましても中々氣の毒のやうに感ぜられる、吾々が其車を挽いて見やうと思ふても到底車挽の仕事は出來ない、詰り車に乘つても十錢の金はやつてあるが、又吾々が受ける恩惠も非常であると言はなければならぬ、萬事世の中の事は共同生活であつて、洵に都合好く出來て居るものであると斯う思ひますると、唯自分のみが成功をしてそれで宜いと云ふものでない、個人としては自分だけの成功を以て滿足すべきものでなくして、社會から受ける恩惠が多くなればなる程其恩惠に向つて報酬をしなければならぬものである、百石の米を百姓から貰へば百石だけ、一萬石貰へば一萬石だけの恩惠を吾々は受けて居る、贅澤をすればする程それを深く思ふのである、其思ふ範圍が廣くなると云ふやうなことでありまして、社會の共同生活に向つて何事をか盡さぬければならぬものであるか、家に對すると同樣に社會にも力を及ぶ限り盡さぬければならぬものである、個人として成功をすると共に社會團體の一員として吾々は成功をしなければならぬものである、社會の共同生活に向つて力を入れなければならぬものであると云ふことを一つ考へたのであります、どうしても社會の爲めに盡さうと云ふことになると、公共心とか團結心とか云ふものも要るやうであります、經世の精神が頗る必要であります、社會の爲めに盡すに公共心も何もなかつた日には迚も社會と共に行動をすることは出來ぬ、だから自分の一個の利害の事などは多少捨て置いても社會公共の爲めになる事なれば、其方面にも力を盡さぬければならぬし、又社會の利益になる事をする爲めには、多少自分の財產なり地位なり名譽なりと云ふものを賭しても人の爲めに盡さうと云ふ所の、精神の發動がなければ社會に盡すことは出來ぬ、先づ自分と社會と云ふものとに對する考としても、先づ公共心團結心と云ふやうなものを根據として行かなければ、社會の爲めに到底盡すことは出來ぬと云ふことを實は自分の腹の据はりとして考へたのであります、さうして多少農事の改良と云ふやうなことにも盡さうと云ふ所の之が腹の据はりになつて居るのである、それで丁度家に盡すと云ふことが根據であつて、社會の爲めに盡すと云ふことが其根據から湧き出て來たものである、例へば之は家の爲めに盡すと云ふことは求心力であつて、社會の爲めに盡すと云ふことは遠心力である、茲に於て始めて個人と社會と云ふものが一致する、己の爲めに盡すのも社會の爲めに盡すのも歸する所は一つである、自利利他と云ふものが茲で始めて圓滿に行くべきものであらうと考へた、もう一つ分り易く喩へ

て言ひますれば、丁度分廻しのやうなもので、分廻しは一つの本があつて圓形が描かれるのである、又護謨のやうなもので、護謨をビューと延ばすと幾らでも延びる、其延びた護謨は放せば本に戻つて來る、所謂家の爲めと云ふ根據がありますから、社會の爲めに一尺でも二尺でも延びたものは放せば本に歸つて來ると云ふやうなものであらうかと思ふて居るのであります、ピ先づそれだけの腹が据はれば、それから以上何事をしまするに就きましても危險もなし又心持も良い、それで吾々は何をするかと云ふと、吾々は其地方に依つて適當なる事を爲しさへすればそれで宜いのである、どうも其どう云ふ事をする斯う云ふ事をすると云ふても、中々千遍一律ではいかぬ、世の中の事は千差萬別でありますから兎も角私は其土地々々で適當なる仕事をして、それを子孫に續ける者である、斯う私は思ひまするので、そこで先づ御參考の爲めに是から御話致しますことは、自分が僅に六年か七年間にやりました事業でありますから、餘り御參考になりますこともありますまいけれども、兎に角御話して見やうと思ふのであります、實は今晩御話するのは、即ち自分が個人的にやつて居ります仕事を鳥渡御話しやうと思ひます、若し又明晩機會がありましたら、社會的にやつて居ります事を御話しませう、今晩は自分の家でやつて居ります園藝場の御話をします、それから私の家に拵へて居ります農會の事を御話致します、第三には耕作物の品評會、第四には信用組合の事、此四を極簡單に御話をしやうと思ひます

私が拵へて居ります果樹園、果畑は三十五年に地並しをしまして、それから著手したのであります、初めは三丁五反程拵へましたが、今日は擴張して六丁歩程のものになつて居ります、それでどう云ふ物を植ゑて居るかと云ふと、雲州蜜柑、ネーブル、林檎、西洋梨、葡萄、桃、枇杷と云ふやうな物を重に植ゑて居る、其外或は牛を飼ふて、さうして百姓に交尾の事をさすとか、或は乳牛を飼ふて乳を搾るとか、或は蜜蜂を飼ふとか、其外西洋の草花を植ゑ、又は芝生を拵へて運動場或は小作人の集會所に充て居ると云ふやうなことであります、是は何れ御視察下さることであらうと思ひますが、其成蹟は如何かと云ふと、實は成蹟は非常に好うございます、現に林檎でありますが、林檎は是迄暖國には出來ないと云ふことに學説は一致して居つたやうに聞いて居りましたが、然るに私の方で林檎が非常に好く出來る、林檎は紅玉（コウギヨク）—滿紅（マンコウ）是が一番良いやうであります、此事は暖國に林檎が出來ると云ふのは不思議であると云ふので、是に由つて始めて學説が破れたと人々に言はれることになつて居る、それから其次に成績の良いのは西洋梨の各種類であります、さうして是は最も味の好い物である、それで之は御覽下されば、今此處で御話するより能く分るのでありますが、此果樹園と云ふものに就て一つ御話を申して置きたい、是には説明が要す

るのである、是はどう云ふものかと云ふと、どうしてそんな事をやつたと云ふ御尋ねに對しては、是には二の目的を實は持つて居る、一つは實利の目的、一つは趣味の問題であります、實利は即ち農家の副業を奬勵しまする爲めに園藝場を設けたので、此普通の米麥作に就ては試驗場は澤山ありますが、園藝的の試驗場は今日では先づ與津にもありますけれども、丁度與津のより私の方が早かつたか同時でありましたかに出來たのであります、今日では明石にもあります、丁度明石の私の方のとは全く開始の年を同ふしたやうなことであります、それで實利の目的としては是非共日本の農家と云ふものは、段々生活費が高くなる今日であるからして、米麥のみではいかぬ、是は何か副業を盛にしなければならぬ、副業の收益を以て生活費を補ふやうにしなければならぬから、副業は何處迄も奬勵しなければならぬ、副業を奬勵するに就ては私の邊は神戸あたりにも十二三里で便利であるから園藝を盛にして見たら宜かろ、都會では肉食が盛に行はれ、殊に神戸には西洋人も多いから果物の改良を圖り、園藝を盛にすることを以て其土地の副業として一つやつたらどうであらうかと云ふことが、實利の方面の目的であります、其邊の考からしてやつたのでありますから、其施設の如きも極平民的に出來て居る、まア經濟的の園藝場と云ふもので、東京にあります高等園藝とは全く趣が違ふて、極百姓の模範となるべきやうに經濟的にやつて居る積りであります、でもう一つの目的は趣味の問題であります、言換へれば道樂の問題であります、道樂として私はやつて居る、私も段々考へるには、人間はどうしても道樂は必要である、道樂がないと云ふと氣を慰めることがない、或は昔から能く琴を彈ずる人もあり、詩を作る人甚を打つ人、或は義太夫をやる人、道樂はいろ〳〵種類があります、私共も道樂の事に就て何か得る所がないかと考へて道樂に就ての研究をした、どうも自分でも之と云ふ道樂は見當らない、如何なる事が青年の道樂として適當であるかと研究するのが一つの道樂のやうになつた、所が此園藝場を拵へて、それで之を一つ自分の道樂にしたらどうであらうか、果樹を栽培して見たらどうであらうかと云ふことを考へた、果樹を栽培することは是は非常に健康上宜しい道樂であります、元來私は身體も丈夫でありませぬから、此園藝と云ふやうな事を道樂としてやれば、始終日光に當つて空氣の新しい野良に出て居ることは非常に健康に適した所の道樂である、それから又第二に考へるにはどうも此人間が始終天然といふものに接觸して、天然の美を愛し天然の感化を受けて、さうして此ネーチュワと云ふものと親むことは精神上愉快であるし、又精神を高潔にする點に於て面白い趣味のあるものである、中々園藝と云ふことは高尚なる所の道樂であると言ひ得られると云ふことを第二に考へた、それから自分の道樂は一個の道樂としては面白くない、社會と共にする道樂でなけ

れば面白くない、それで茲に園藝場を拵へたならば、自分が樂しむのみならず、多くの人と樂しむことが出來る、共に趣味を語つて多くの人の模範にもなり、又共に來て貰つて園藝の道を談ずることは之はどうも此道に於て天下に友を求める譯であるから、道樂として好いものであらうと云ふ考を持つて此園藝場を拵へたのであります、そこで園藝場を御覽下さるに就ては唯園藝場を拵へたと云ふのでなくして、私の言はゝ道樂場であります、昨年も平田男爵なり有働君が見えましたが其時に伊藤君の妾宅を訪問したと云ふことを雜誌に書くと云ふ話でありましたが、先づ諸君が御越し下されましたら、園藝場は私の妾宅と思ふて御覽を下さいますやうに此處で御紹介を申して置きます

それから次に御話をしますのは、次に私の家で組織して居ります伊藤家農會と云ふものゝ組織に就きまして御話をしやうと思ひます、で伊藤家農會と云ふと、何か別に是と云ふものがあるやうに見へますが、決してさうでないのであります、伊藤家農會と云ふ名は便宜の爲めに伊藤家農會と云ふた迄である、他主小作人の關係に至つては何百年來の間續いて居るのでありますから、私の方に於ては無名の農會は古來繼續してあつたに相違ないが、併し物と云ふものは改良をしやうとか、事を新にしやうと思ひますると、何か變つた事をやりませぬと注目を引かぬ、それで從來繼續して來て居る所の關係を持つて居る私と小作人とが一致して、其關係を取つて來て農會を組織して、伊藤家農會と云ふ名前を付けた、伊藤家農會と云ふ名前で規則を拵へた農會である、詰り其會員は自分の小作人であつて、其會長は私であります、さうして各村の小作人を統御して居る者が此會の代表者であると云ふことにして居るのであります、伊藤家農會はどう云ふ事をやるかと云ふと、毎年正月代表者を寄せまして年始をする、さうして其席に於て其年に農會として奬勵すべき農事改良の事項を協議する、是はどう云ふ風にするかと云ふと、大抵他の縣農會なり郡農會で多くやりましたやうな仕事を、此農會に向つて勵行すると云ふ方法を取つて居るのであります、他の系統的農會の事業を伊藤家農會が奬勵をすると云ふことになつて居る、直接の仕事としては其事項を協議します、時間があれば講話會を開いて講話を聽かせると云ふやうなことであります、で其外農會の事業としては農事改良、品評會、小作人信用組合は此農會の一つの事業となつて居るのでありますから、さうしますと此農會は農事改良の詰り研究所と見ても宜い譯である、或は農事改良の參謀部と見ても宜い、又地主小作人の倶樂部であると云ふやうに見ても宜い、兎も角地主が小作人に對して親睦の度を增し、農事改良の事を研究すると云ふ爲めに、此伊藤家農會と云ふものを組織し、規則を設けたと云ふことに御承知を願へば宜いと思ひます、で私の農事改良に對する意

見としましては、農事改良機關としては上は農商務省を始め縣廳なり郡役所なり或は村役場なりがあり、又他の方面には農學校があり農事試驗場があり、農事改良の機關となるものは完備して居る、其他系統的農會と云ふものもあります、併しどうも之を側面から觀ますると云ふと、どうも其實際に農事改良と云ふものが機關が完備して居る割合に實蹟が擧らないと云ふことを常に感するものはどう云ふものであるかと云ふと、どうしても此農事の改良と云ふことに就ては日本の農業と云ふものは自分の田を自分で作つて居る人は僅に三割五分位しかない、之に反して小作人を使ふて小作制度に於て農事を經營して居る者が六割か六割五分の多數を占めて居るのであります、でありますから自作の者は自分自身の田地を改良するのであるから、やるかも知れないが、一方の大多數を占めて居る所の小作制度に依つて行はれて居る所の農事はどうして改良が出來るかと云ふことを抑考へて見ますと、多く此改良の事に就ては直接小作人に其矢が當る、で地方の巡廻教師でも小作人に向つて農事改良の勵行を奬勵して居る、小作人の上には地主と云ふ者があるが、之は殆ど顧ないと云ふ地方が多いのであります、然るに此小作人と云ふものはどう云ふものであるかと云ふと、一般に小作人は智識の程度が低く、且つ改良に要する資金の乏い者である、其小作人に向つて改良の矢が行て居るが、其小作人を左右して居る所の地主はどうであるかと云ふと、年々一度の小作米さへ餘計に取りさへすればそれで宜いのである、農事改良の考があらうがなからうが、改良をしやうがしまいが、それは小作人が勝手にすべきものである、地主は地主として米さへ取れば宜い、一粒でも餘計に取りさへすれば宜いと云ふ風になつて居る、さうして此地主は概してさう云ふ態度であるが、それはどう云ふ所でさう農事に對して冷淡であらうかと云ふことを私が考へて見ると、地主は農業に對して自分は農業者であると云ふ考がない、地主は唯自分の農業地面に資本を投下して居るのである、農業に對する資本主である、地面を買ふてなんぼの收穫があつて、それに對してなんぼの地租を拂ふて居るから、其米をなんぼに賣れば年何朱に廻はると云ふとしか頭にない、さうでありますから幾ら〳〵の値で買ふて置けば此田地は或は五朱に廻るとか、或は六朱か七朱かと云ふやうな算盤勘定を以て買ふたものである、其上に地主は一粒でも餘計に小作人から年貢を取れば儲かると云ふ商業的の考を以て地主は地面を持つて居ると云ふことであります、から、之が我國に於ける農事の改良が出來ない病根であると云ふことを、先づ私の經驗上斷言して憚らぬと實は思ひます、それがどうもいかぬ、農事改良の出來ぬ所以である、農事に對する地主の態度が誤つて居る、だからどうしても此農業を改良しやうと云ふことであれば、地主が商的觀念、資本主と云ふ考を改めて、自分は農業に對しては一面農業者である、自分は農業を營んで居る者で

あるが、田地が餘計にあるから自作することは出來ないから暫く之を小作人に貸して、さうして小作人にやらして居るのである、自分は飽迄農業者である、で農業者であるから自分が農事を改良しなければ誰がするであらうか、此農事改良の事に就て無資産である所の智識の少ない小作人にのみ托して置いて宜いかどうか、地主は如何にすべきものであるかと云ふことを諮問したなら、必ず之は地主の双肩に懸る所の責任であると云ふことは、必ず自覺の付くべきものであらうと私共は考へて居りますし、又さう云ふ考を以て如何にも之は吾々地主として小作人に對して商的考を以てやつて居つたのは誤である、それは農業者の位地に返つて考へて見れば農事改良は地主が捨置くべきものでない、小作人を助けて共同してやらなければならぬものである、小作人と地主と兩方の共同責任である、共同責任であるとすれば、資力のない智識の少ない所の小作人に任せて置くべきものでなくして、奬勵の責任は地主にある、さうであるからして此農事の改良と云ふことに就きましても、どうしても地主が公共心を發揮し、多少此前に申した犧牲の精神を以て農事の改良をやると云ふことにならぬければならぬ、そこで私の考へるのは農事改良の先づ順序としては、どうしても地主の態度が更まつて來ぬければならぬ、地主の頭を先に改良することが農事改良の一着歩である、さうして地主の頭が農事の爲めに盡さなければならぬと云ふことになつて來て、そこで小作人の頭を改良して、此地主があるから此地主の爲めに盡さなければならぬと云ふことになり、地主と小作人との頭が改良されて、始めて農事改良の成功が完全に出來るのである、所が徒に法令を發布し、或る權力の下にそれをやらすと云ふことは、是は農事改良の策を得たものでなくして、末の末なる策である、農事改良の順序は地主の頭と小作人の頭とを改良して、而して後に勵行すると云ふのが本統の農事改良の順序であるまいかと思ひます、丁度一昨年私の園藝場へ姫路の十師團の將校連中を、凱旋された際に五六十名招きまして歓迎の意を表したことがありました、丁度其時に安東師團長が私に向つて、君はどうも非常に農事の改良に熱心だと云ふことであるが、農事の改良をどうやるかと云ふ質問を受けた、其時に私答へて曰く、農事改良と云ふと澤山あるが、小作人の頭を改良することは、どうして農事改良の一着歩であらうと思ふ、所謂小作人の農事の改良を勵行する前に、先以て精神的に頭の改良をやらなければ農事の改良は出來ぬと思ふから、自分は其方面からやらうと思ふて居ると云ふ話をした、安東師團長が、それは妙な話で、丁度私共が軍隊の教育をするのも全くそれである、軍隊的精神を先づ吹込む、軍隊の精神が充分に吹込み得たら既に其教育は半出來たものである、軍隊に於ても精神教育と云ふことを大變やかましく言ふが、今の話とどうも合ふやうであると云ふやうな話を聽いた

こともありましたが、やはり軍隊の教育に於てもさう云ふものであると云ふとすれば、農事改良の如きも先づさう云ふものであるまいかと思ふので、寧ろ自分の説を其場合に一層强くしたと云ふやうな次第であります

それから小作米品評會の事をちよつと御話致します、小作米の品評會は本年の四五月頃に開くことになつて居りますが、本年で第五回でありまして、初めの年は一郡を以て一つの區域としてやりまして、それから二年目三年目と云ふに從つて區域を擴げ點數を多くしました、詰り漸次經驗を積むに從つて出品の區域を廣めた、實際申しますと、私の方の田畑は貴君方から較べると極僅少でありますが、僅少なる割合に區域が非常に廣い、殆ど十一郡に跨つて居るので非常に不便でありますけれども、先づ漸次品評會をするに就ては、十一郡の分を一遍には混雜でありますから、年々區域を擴めてやりました、どう云ふ風にしたかと云ふと、小作米を取立てる際に、其俵の中へさしを入れて米を取り、それで何村の何某と云ふことを書いて袋に入れて別に保存して置いて、其品を出品すると云ふことにしたが、どうも其小作米の中から拔き出してやりませぬと、どうも特種の品物を持つて來ると云ふことが品評會には往々ありますので、出品する物だけ非常に能く手入をしたりして年貢米と違ふた物を持つて來ると云ふことがあります、取立てた所の小作米の俵の中からさしで取つて袋に容れてそれを出品さすと云ふことにして居る、で審査は成べく公平にしまして、米商で米の鑑定の出來る者、其他縣廳の技師と云ふやうな各方面の人を三人程招聘しまして、其人に審査して貰ふ、さうして賞品は一等から五等迄、之は年々換へることにして居る、賞品の種類は或は農具を遣つたこともあります、或は肥料を遣つたこともあります、で其外此農事の改良は妙なもので、農事の改良は必ずしも主人のみがするのでなくして、寧ろ小作人の嫁とか娘とか云ふ者が頗る力のあるものである、それで必ず爺父を喜ばすと云ふことでなくして、家内を喜ばすと云ふ策を執るのは宜いやうであります、それであるから女子の喜ぶ所の反物類の婦人の好く物を遣ると云ふことは、是は賞品として利目があるやうに考へて居ります、御參考に申して置きます、それで會場は寺などでやります、天氣の好い日でありますれば、前申しました園藝場の芝生の上に天幕を張つてやるのであります、成べく此席は立派にやるが宜からうと考へて居ります、先づそれで充分に裝飾などをして、それから必ず縣知事とか郡長とか云ふ人を招待して、盛に式を行ひ、さうして式以外に是等の人々から皷舞して貰ふと云ふことは非常に利目があるやうに思ふ、田舍でやつて居るのは式は簡單で濟んで居るが、私の方針は成べく式と云ふものを利用する、是を盛にして其席に於て賞品を貰ふと云ふことが無上の光榮であると云ふことを考

べさせて、さうして一面講演を盛にやつて貰ふと云ふ方針で常にやつて居ります、それから此品評會の成績はどうであるかと云ふと、丁度昨年で四年でありますが、其四年後に於て始めて成績が現はれて來た、一二年は成績を見ることは出來ませぬ、一年に一遍の出品でありますし、今年も又開くか開かぬか分らぬと云ふので彼等に疑がある、一遍やつたらそれが爲めに非常に勉强するかと云ふと中々さうはいかぬ、四年目に於て多少品評會はあア繼續してやる、是は注意をしたらどうであらうと云ふことが頭に感せられて來る、漸く四年目に成蹟が見へたやうに思ひます、品評會の如きものは一二年は唯花火線香的のことであります、少くとも十年も二十年も長くやるにあらずんば花火線香に終るものであると思ふ、それから餘り長くなりますが、もう一つ殘つて居ります、是だけを申上げて置かふと思ひます、

此次に申しますのは伊藤家小作人信用組合であります、即ち私の家で小作人のみを組合員として經營して居る所の信用組合でありますが、此信用組合を拵へることに就きましては、此處に居られまする所の平田男爵なり加納子爵の兩閣下から厚き御敎を受けまして、此組合を拵へたやうなことでありまして、段々此信用組合の効能に就て考へるのに、どうも我日本に於きましても、いろいろ事業が盛である、其盛である所の事業の中で、最も發達して居るものは此銀行事業、金融事業は我國で最も發達して居る所のものである、普通銀行の外に農工銀行とか勸業銀行とか、或は興業銀行とかそれ〳〵金融機關は完備して居るやうに見へるですが、併しながら是等の銀行なるものは金持の銀行である、金持の機關銀行で、金持であらずんば金を借ることは出來ぬ、相當の抵當があつて始めて銀行から金が借り得られるのである、金の要る所の小農者小作人と云ふやうなさう云ふ方面に於ては、今日の銀行は如何に盛であつても均霑を受けることは出來ぬ、今日の銀行は全く金持の金融機關であつて、貧乏人の金融機關でない、それでどうしても今日の銀行と云ふやうなもの〻外に、此小農者なり小作人なりと云ふやうな身分の者に對しては、其金融機關として信用組合が起らぬければならぬものであらうと考へて居るのであります、さうして先刻も平田男爵閣下から段々此產業組合の御話がありましたから、餘り長く私から是に就て申しまする必要はありませぬが、此信用組合は其目的として居る所は、其組合から資金を與へて、さうして其資金を以て働かす、働くに金がなくては働らけぬから一面に即ち資金を供給して勤勞の道を開く、さうして勤勞から得た所のものは組合に貯蓄して行く、貯蓄が出來れば自然に其人に信用が厚くなつて來る、所謂勤勞貯蓄を以て信用を厚くすると云ふ方面からして人間を完全な者にしやうと云ふのが、即ち此信用組合の表から奥迄ずつと徹つた理想であらうと思ふ、それで私共は此信用組合

を自分の小作人に向つて奬勵をしまする趣旨としても、同く其趣意を受けまして其信用と云ふものを皷吹して、どうしても人間としては信用がなければならぬものである、さうして經濟の方面からして信用を高めぬければならぬ、併し又或る一面から觀ると、信用組合と云ふものは非常に危險なものである、他の銀行や何かゝら是を觀ると、無資産の無教育の者に信用で金を貸すのであるから非常に危險である、それは理想としては資金を與へて勤勞をさせて貯蓄をさす、さうして完全なる人間にしやうと云ふのであるから宜いが、營利で之をやると云ふことに就ては信用組合なるものは危險である、そんな事は出來るかどうかと云ふことを言ふ人がある、其處が即ち此信用組合たる處である、信用組合と違ふ所は、銀行は唯營利を目的として居りますが、信用組合は一面は經濟で、一面は道德である、道德と云ふものを皷吹して此二者相待つて行くのである、さうであるからどうしても之は信用組合を完全にやらうと思へば、どうしても多少の道德とか宗教的の意味を組合員に皷吹せぬければ、其組合は頗る薄弱である、常に組合の總會に於きまして精神的の話を實はして居りますやうなことであります、で何時も私は組合員に言ふことでありますが、ちよつと御參考に一言言ふと、此社會に於て人生として最も必要な物程容易に得られる、必要な物程無代價で得られる、不必要な物程代價を高く拂はなければならぬ、人生に最も必要

缺くべからざる物は何であるか、是は空氣の如き理想の如き、其他人間としてどうしても缺くべからざる必要なる物は割合に安い、殆と代價を拂はずして吾々は得ることが出來る、是は天の惠である、實に高大なるものであるが、必要なるもの程容易に得られる、人間が生活上必要でない所のもの程多くの代價を拂ふ、大學者にならうと思へば苦勞が要る、金持にならうと思へば是亦非常の苦勞が要る、併しながら是等は人生としては必要缺くべからざる物ではないので、大學者にならうと云ふのは其人の望である、大なる金持にならうと云ふのは其人の特種の望である、吾々が人間として必要なる物は天が自然に惠んで居るのである、所謂無價の重器で、吾々は容易に得ることが出來るのであると云ふ話を申します、此は此信用組合に信用と云ふものを皷吹する爲めの私の考であります、金を拵へぬければ信用が得られぬ譯はない、例へば十萬圓の金を持つて居つても一萬圓の信用しかない人もあるかも知れぬ、資産はなくても彼の男なら十萬圓の金の包を持たせてやつても別狀ないと云ふ信用がある人もある、信用は有形の信用のみでない、無形の信用もあります、是は何處に在るのかと云ふと、自分の頭に在る、是は多くの學問を知らなくても、金を持たなくても頭の中で、自分は一度言ふた所は違へない、信用は重じなければならぬと云ふことで、人から信用を得たならば、信用は何百萬圓の財産にも代はるものである、信用と云ふも

のは人世に於て最も必要なるものであつて、是は天が人に與へて居るのであるから、其良心を研き其信用を發揮しさいすれば宜いのであります、故に信用組合員たる者は其信用と云ふことを自覺して、嘘を言ふてはならぬ、借りた物は期日に返へさねばならぬと云ふ考を持つて呉れと云ふことを何時もする話であります、詰り此處が先刻平田男爵の御話になりましたやはり此道德を鼓吹すると云ふことは、斯う云ふ點に在るのではないかと思ふのであります、それで此信用組合の昨年末の景況を數字になりますが申上げます、此信用組合は三十八年の秋に設立しましたが、是から申ます成蹟は四十年末、一口が三十圓、人員が千百五十人、口數が二千百七十五口、さうして拂込金三萬千四百六十五圓、それから四十年度中貸付金二萬千六百三十二圓、有抵當が七百十圓、どう云ふ事の爲めに使つて居るかと云ふと、肥料の購入、牛馬の購入、それから營業の資金、それから養鷄の資金或は家政仕方金、土地開墾及改良の資金、斯う云ふものである、それから貯金が小口で三千三百八十六圓、定期で千六十二圓、それから本年度の準備金と剩餘金を合せて三千五百四十一圓、全く純益になるものである、是が詰り二ヶ年の間の組合の純益である、それで出資の一口に對しては此利益の持分が一圓六十二錢八厘になるのであります、それで僅に二ヶ年の間に於ける成蹟で、此三千五百四十一圓と事ふ成蹟を得ましたに就ては、多少の説明が要るのです、それはどう云ふことであるかと云ふと、此組合は成べく此組合員を募集しまする點に於て、且つ組合員に對する便宜を與へる點に於て眞面目に組合の鞏固なることを希望する點に於て、組合の成立以來の總ての經費を私の一個の懐から支出をして居ると云ふ事柄である、此組合は成立以來一厘も組合の金を使はずして、私が其經費を負擔して居る、成立以來千百六十四圓の金が要つて居る、併し一千何百人の人が喜んで呉れるとすれば、二ヶ年やりましても一人前一圓しか付かぬのであります、一圓の金を遣ると言ふてはそんなに喜ばぬが、事業をやつて一人前一圓宛出して遣つたと云ふことは組合員も喜び、又社會の爲めに幾分盡したと云ふ譯になるから、千百六十四圓と云ふものは、金額では少ないものであるが、是が三萬圓にも五萬圓にも吾々の爲めには働いて呉れたので、此金は誠に安いものである、又非常に役に立つたものであると云ふことを常に自分は思ふて、組合の爲めに盡したのは無駄でなかつたのを自ら喜んで居ることであります、其代りに其組合で出來ました剩餘金は、私の方で補助をして居る間は、組合員は一厘も利益金を配當することは許さぬ、組合の基礎を鞏固にする爲めに盡く積立てると云ふことにしてある、今日の積りではもう二年半程しますれば丁度金額三十圓拂込ひことになりますから、私の方で經費を一切受持つてやれば、剩餘金が一萬五千圓も出來やうと思ひます、それ迄やりましたらもう補

助する必要はありますまいし、補助をすることを辭退を申出るであらうと云ふことを思ふて居ります、今日でもさうどうも經費を出して貰ふことは濟まぬからと云ふて居る組合員もありますが、是は全額拂込む迄は此方の方からして置くからと云ふて居りますので、丁度三十圓拂込む迄には相當の金も出來、組合も鞏固になれば獨立の一つの事務所を設けて、其處で一つやりたい、今日の所では別に事務所は出來て居りませぬ、もう二年先になりましたならば、獨立の事務所を置いて、組合員からして總ての支配をする者を出してやらすと云ふ考を持つて居ります、

豪い長くなりまして御退屈であつたらうと思ひます、私は今晩は是で御免を被ります、明晩は又横會を得ましたらば縣農會の事業と、それから兵庫縣で地主が寄つて拵へました米穀檢査を縣の事業としてやつて貰らうと云ふ爲に出來た期成同盟會の事業に關すること、それからもう一つは郡の事業で三治協會と云ふものを設けて居りますから此事と、三つの事柄に就て御話を致します、明晩又御目に掛るかも知れませぬ、甚だ御退屈で御座いましたらう。

子爵　加納久宜君演說

（産業組合に關する雜感）

私は加納久宜と申します、今般諸君の御出京に就きまして、私からも何か御話をしたらどうだらうと云ふ平田會頭から御話がありましたが、私は昨年櫻井君及林君の御紹介に依つて積善組合の總會の節に御縣へ參上を致しましたこともございますので、定めて其節に御來會の御方もあつたらうと思ひます、其上に私が御話をしまするなどゝ云ふことは、自分のやつた事の外には何にも種がございませぬので、又是に就て理想を付加へると云ふやうな學識もございませぬ、又私共は別に廣大な土地を持つて居ると云ふやうな資產もないのでありますから、御話を申しまして諸君の御參考に資すると云ふやうなことは毛頭出來ぬことゝ考へて居ります、唯聊か私が個人としてやつて居ります事實をば繰返して御話を申上げまするに過ぎないのでありますが、唯私が御話を致しまする事柄を未だ御聽きになりませぬ御方に對しまして或は幾分の御參考になるかも知れませぬが、既に御聽きになりました御方に對しては、一つ話を何遍も繰返して申すに過ぎませぬのであります、殊更大分更も聞けましたから諸君も御草臥であらうと思ひますから、理論を取つ

て除けて、唯實地上に就きましての御話を一二申上げて御挨拶に代へやうと存じます

一兩日前の新聞にも一寸見へましたが、或る歐羅巴の文士が調べた統計に據ると革命黨が目下歐羅巴には七百萬人の多數を占めて居る、其内獨逸は五百萬佛蘭西は百萬伊太利丁抹其他の各國に或は五十萬或は十萬或は五萬と云ふやうになつて居る、是等は一般の社會に於て注目すべき所の事實であります、千八百八十八年に於て米國での選擧の際に革命黨から出した票數は壹萬四千票ばかりであつたのが、十九世紀の第四年即ち千九百四年、千八百八十八年を距ること僅かに六年で四十五萬何千票と云ふ多數の投票が革命黨から出たと云ふことであります、斯の如き出來事は餘程社會の爲に注意すべき事柄でありまして、社會の爲に之を融和して社會の平和を攪亂する虞のないやうに防禦すると云ふことは、一般良民が注意しなければならぬ事ではあるまいかと云ふことが新聞に書いてあるのを見たのであります、即ち是等の救濟策として、どう云ふ手段方法を採たら宜いかと云ふと、是等社會黨的流行病を絶滅する所の策としては即ち產業組合と云ふ血清治療を以てするより外に策はないと思ひます、此流行病をば絶滅すると云ふ手段方法として信用組合又は他の產業組合が偉大な効を持つて居ることは既に先刻平田會頭より、又伊藤君よりも其効能を御述べになつた次第でありまして、其上之に付け加ふべき餘地あるを認めませぬ、唯私の望

む處は今日諸君の如く多數の小作人を使つて御いでになつて其小作人と地主との間に主從の關係或は師弟の關係を持つて居らるゝやうな間柄に對して、殊に此血清治療的の手段方法を施されて、世の平和一身の安寧を維持されることは最も必要であらうと思ひます、其局外漠たる吾々資產のない、即ち少數の小作人ならでは持たない者迄も、何故に信用組合が必要かと云ふと、自身一家を安寧に維持して行くにも欠くべからざる要件であらうと思ひますので、即ち明治三十五年の七月に信用組合を拵へましたが、四十年度の決算に據りますると丁度其時の組合員は百九十人でありまして、貸借對照表に載せた資產の總額が二萬五百圓ばかりになつて居ります、拂込は出資一口十五圓で、總體の出資金額は一萬三百五十圓、貸付金が一萬千八百圓、積立金が法定準備金と特別積立金とを併せて千七百圓ばかりです、元來私は此組合を拵へたのは、自分の居村さへ善ければ、それで滿足するのではありませぬ、全國一萬三千餘箇の町村に少くとも一つ宛の信用組合が必要である、之があつたら日本帝國の富力の上に一段の大基礎を固むることが出來るであらうと思ふので、之が私の生涯の望であります、試みに三十五年以來百九十人の組合員を以て組織して第六回の總會を了つたる自村の信用組合を標準として一萬三千餘個の町村に假に一つ宛吾々と同樣な年代を經歷した信用組合があると致しましたら丁度二億六千萬圓ばかりの富力を高ひ

ることになる、此二億六千萬圓と云ふ廣大無邊の金はどう云ふ方面に向つて働かれるかと云ふと即ち資産の甚だ少い、生活の極めて劣等な下層の位地に在る所の者の頭上に運轉自在に活動するので、斯る出來事は我帝國の創建以來未た曾て其の比を見さる處の新事實であります、斯の如く此組合が日本帝國の全部に普及致しましたならば實に國家を泰山の安に置くと言ふたら些と過言であるかも知れませぬが兎に角に今日の日本帝國の進運と相伴ふて民力の增加と云ふことは慥かに言はれる事實であらうと思ひます、殊更歐羅巴各國に於ての貯蓄金の額の最も多い國々であつてさへが一人百四五十圓に過ぎないと云ふことでありますが、吾々共百九十人の組合員に對して二萬圓と云ふ資産を割つて見ましたならば一人が百有餘圓に當る譯でありますから、そんなに歐羅巴各國の中で一番貯蓄高の多い國なぞと云ふて決して驚くに足らないと思ひまして、私は帝國の前途を極て樂觀して居るのであります、若しも各町村が奮發してやる日になれば、なアに歐羅巴の丁抹や瑞西が世界第一等だの何のと云はれて居ても是等を凌駕するのは僅々四五年の間にあると思ふ、殊更是は私等が一錢一厘の金の爲に算盤を取て汲々として世話を燒くのは、餘計な心配で、誠に物好き千萬な奴であると局外からは思はれるか知れませぬが、資産あり又地位ある者としてはどうしてもやらなければならぬと思ふ、今迄の社會の有樣は五六年の間に於て一萬四千票の高が四十何萬と云ふ票數に上る迄に革命黨とか云ふものゝ增殖して行く所の勢から考へたら其影響の及ぶ所其迷惑を感ずる所、那邊にあるかと云へば皆是は社會の中流以上の者に對して働きかけられるに極つて居るのでありますから、吾々が一家の資産を保ち、一家の安寧を保護しやうとするからには、斯る流行病に向つて極力充分なる血精治療を施して、忌むべき社界の惡疫を其村方には入込ませないやうにするのが唯一の手段である、是即ち自己の利益を保全するの結果が延て一箇村の安寧を維持するに至るのであります、是は決して吾々の物好きであるのでない、寧ろ當然の義務である、否な義務でない、寧ろ正當防衛であると思ふ、之れに反して下層界の生業を向上せしむるに努めず貧富の懸隔をして益々甚しきに至らしむる現代の趨勢に放任して置くならば終に吾々の家をも滅亡し了ると云ふ順序に運んでしまふのは分り切つたる事實である、要するに私の覺悟は恐れ多くも朝廷より禮遇特典を辱ふして居る光榮を失はないやうにするには社界の最下層に居る者を引立て吾々の仲間入りを爲し得る所の人數を殖やし資産あり地位ある國民とならしめることを努むるのは、是ぞ自己の子孫をして安寧ならしめ長に社禝を保全する所以の根本策たることを疑はぬのである故に大地主の諸君に於かれては小作人を愛護して其の利益幸福を計らるゝのは決して小作人に恩を賣るに非ずして、御自身御一家の安寧を保全せらるゝ所以の

道であらうと憚りながら信じるのであります、殊に信用組合の剰餘金即ち利益の配當は私の組合では五分以上は出來ないから一寸考へれば薄利の樣でありますが、從來の實驗に依れば總資金の一割一分乃至一割五分あつて此純益金から法定準備金を引き去り五分の利益を預つて置く、其殘金は特別積立金となるのでありますから、出資金十五圓に對する五分の利益は七十五錢であるか、四十年度に至りては出資金十五圓の外一口に付金三圓四十六錢の持分を合すれば丁度一口が十八圓四十六錢で之に對する五分は九十二錢である故に其純益は一口の出資金に對して年七分に當つて居る、此割合を以て組合の積金が增加して行たならば今後十年も經たらんには一割は愚か二割三割の配當にもなるであらうと思ひます、

右は近頃資金以外に持分が殖へて來たので此新事實を發見した次第であります、又先刻も伊藤君から言はれた如く信用組合は信用貸であつて危險のやうでありますが、弊村組合創立以來五ヶ年間に貸倒れは一つもなく、組合は未だ一文も損を被つたことはない、又組合員に對し特に修身講義も何にもせぬけれども、彼等をして自然に德義を守らしむべく法律は拵へてある、伊藤君の御注意の如くに、不知不識の間自然と村の風俗を純美にし、立派な良民を作り立てらるゝは言ふ迄もない所は組合に損を掛けるのは自ら其損害の一部を負ふのである、自ら剰餘金の配當を少くする所以である、組合に損害を掛けて不義理をすれば其の申譯は一人に對してではない、組合全員逢ふ人毎にせねばならぬで迚も同一の村に住で居れなくなつて、臺灣か樺太か遠方に逃げてしまふの外に仕方がないと云ふことになるから、寧ろ奇麗に約束通り期限通りに返すのが一番心持が良い、唯心持が良いばかりでなくそれが自己の利益である、利息をチヤン〳〵と拂ふのは詰り剰餘金の配當を多くするのであるから、其約束に從ふのが最安全であるとの了間に導かるゝは實に法律が自然人民の德義心を高むる微妙なる効果であります、信用組合に就きましては唯今精く伊藤君からも事實の御話を申されましたから私は唯其の効果の點に止めて置きます、去りながら私は此信用組合のみではまだ滿足が出來ぬ尙其本原となるべきものがあるだらうと考へるのであります、それは何かと云ふと信用組合は勤勉力行で稼ぎ出した其金を組合の資金に投ずる、又一方に於ては餘計な金があれば之を貯金にする、此二つである、然るに下層人民の生活費は之を上流界に比すれば比較的非常に高い其高い部分は低くして暮らせる樣にしてやらねば取も直さず片足に靴を穿いて、片足は跣足であると一般だろうと思ふ、それは諸君能く御承知のことで例へば米を買ふとしますれば、吾々は一俵か二俵を一時に買ふ、所が彼等は漸く一升か二升である、又石油であれば、吾々は一時に一箱買ひますが、彼等は漸くランプに一杯か德利に一本ならでは買は、

ぬそれであるから割合に高い代價を支拂はなければならぬ、今一つ適例を云へば鉛筆を買ふにしても吾々が買ふ一ダースの鉛筆は二十錢であつて一本が一錢六厘にしか當らないのに彼等が同一の鉛筆一本を買へば其價三錢であつて吾々は彼等よりは反て二割安價の物品を買つて居るのである、若し彼等をして吾々と同一の價を以て同一の物品を買ふことを得べからしめば即ち二割の利益は當然生活費から浮ひて來る、されば彼等の月々の生活費金十圓だと假定すれば其利益の二圓を信用組合資金に投じ尙勤儉貯蓄を怠らざらしめば彼等の資金は多々益多くなるは當然の結果である其方法は即ち消費組合即ち購買組合である、此組合が出來て信用組合と丁度車に於ける兩輪となつて適當なる履物を兩方の足に穿かせたのと同じことになると思ふ、是が出來ねば信用組合も未だ充分の効力を認めることは出來ぬ、假に一貫目の効力が現はるべきものも、消費組合がなければ五百匁ならでは効力を顯はすことは出來ないだらうと思ひます、是は小作人を持つて居らるゝ諸君で御覽でなされば、此消費組合事業は極めて都合好く行はるゝでありましよう幸ひに此組合機關に依り安價な品物を購入し彼等をして生活上の不幸より免るゝことを得せしめられたならば、地主と小作との間實に主從の關係に等しき一種の溫情は他人の企及す可らざる効果を奏せらるべきは、必然の數たるは更に疑ひを容れざる處であります、換言すれは諸君は右手に信用組合を握り左手に購買組合を掴み双手を以て下層なる町村民の生活を高め生產を饒ならしめは其恩德は長へに彼等の子々孫々に相傳へて、所謂陰德積善の道に叶ひ國家も亦切に冀望する處なるは信じて疑を容れないのであります、

乍併現代の組合を將來盡善盡美の域に發達せしひるには今より豫め最良の種子を播て之が萠芽を促かし他年一日多量の收穫を產業組合に收ひるの準備がなければならぬと思ふ、抑前述組合員の多數は、小學の敎育を離れた青年者であります、御縣はどう云ふ割合になつて居るか知らぬが、大抵中等敎育を受ける者は僅かに十中の二であつて普通敎育を受ける者はその八である、而も此多數の青年は國民敎育の學問界を離れて丁年に達する迄は實業的修習を爲すの機關を有せすして空しく親の膝下に日を暮らして居るのである、されば社會の中堅となり未來の良民となり尙且他日產業組合員となつて町村自治の發達を圖る者も亦此多數の青年者に外ならぬのである殊に實業を實際に修習し諸種の經驗を積むに最好の時機は此青年の時代に限るのです、其手段方法は實に青年團體を組織するに在りと信します、依て此目的を以て私の鄕里なる千葉縣長生郡一の宮にも近頃青年團體を拵へました、青年會と云へば直に夜學會だらうと聯想せられますが、私の主義は斯う云ふ乾燥無味な青年團體を造るのでありませんが即ち主として農業商業の實驗場を造るのである

其修習科目は普通農事園藝家畜家禽造林軍隊教練特殊の短期講習普通夜學特殊夜學である、十五歳以上の青年者を以て組織し其中より會長幹事評議員及び庶務會計等を選任せしめ總て青年者を以て之に充て先つ事務處理の修習から初めさせるので一町歩の試驗場には桃梨密柑枇杷葡萄此五種類を各一反歩宛植付けさせ、殘り五反歩は普通農事の修習に宛てそれから植林に要する苗圃を仕立てさせる外に水田五反歩は灌漑排水其他一般的改良農事の實習場と定めて居ります、次は造林である此の造林は即ち青年會の基本財産で事業經營の命脈であります、元來青年會の名を冠つて居る團體は町村到る處に出來て居るが旦に起つて夕に潰れるのは所謂空中樓閣で據るへき基礎がないからである要するに財産なきの團體は團體たるの一要素を缺いて居るからである故に一の宮青年會は其組成と同時に五十年間基本財産として、町有の裸山十六町餘を借り受け之に植林し營林の方法を修習し愛林の思想を啓發せしむる練習場に供し青年會を永久的に維持する目的である、それから家禽、千葉縣は鷄卵と肉鷄との輸出が二百萬圓を超へ重要物産の一に數へられ養豚も亦之に亞ぎて第二の物産となつて居るので、農家重要の副業であるから青年時代に充分經驗すべき必要なる事業の一である、依て園藝場内を劃して優良なる洋鷄を蕃殖用に備へ内國種又は雜種を以て人工孵化法及び去勢法等の試驗用に充て、又養豚は普通農場の中に飼育して俱に町民の生産業に資せんとするのである、それから商業實踐、此の修習は簡易なる書籍又は口授を以て其の大要を研究せしめ其他學科術科を學ばせて、商業簿記各種手形の應用方用の研究は勿論豚の飼料代金の仕拂や肉鷄又は産卵の商買取引等は、夜學で覺へた簿記法に依つて帳面に載せると云ふ樣なる手段を行ひ、苟くも青年會總ての行爲は皆社會的事務修習ならざるはなき樣の方針を執り而して我々有志は遠方から彼等が自治的行動を保護して行くの趣向であつて、前に述べたる諸種の修習は總て專門學者又は當局の指導監督に俟つのであります、是即ち一ノ宮町有志の輩が青年會で云理想の實行と信用組合前途の發達を促さんと欲する信念の表顯でございます、幸ひに大地主たる諸君が善良なる未來の小作人を養成せらるゝ上に就いて萬一の御參考ともなるならば眞に本懷の至りであります、

もう大分夜が更けましたが今一ッお話致す事があります、抑青年者の原産地は小學校である、然るに全國多數の學校は未た教育が獨立して居らぬ、村の休戚即ち年の豊凶や風水害等の災に罹ることがあれば直ちに學校費の收入豫算に影響を及ぼして教員の給料の据置きとか校舍增築の繰り延へとか設備品購入の見合せとか云ふことになるのであつて、學齡兒童が一生に二度と逢はれぬ國民教育の年代を麁末な黨閥に過ごさしめらるゝのは教育が獨立して居らぬからである、此の不

幸を免れしむるには學校に基本財産を供へ其利息を以て學校を維持して行くの一途あるのみである、私の此信念は今より六年前から實行して、大抵一年に百圓位の積金を爲し五十年後に至り始めて四萬圓以上の基金を得んとするの目的である、併し無意味に金を集むるは決して永續するものではないから、其の手段として物産品評會を開き其出品賣却代金は學校基金に寄附して貰ふことに定めてある、處か意外に成功して昨年十一月の第七回品評會の決算は前からの元利を合せて二千圓以上になりましたから、此勢で押して行けば五十年に至らざる内に豫定以上の金は出來るでせう、さすれば學校の獨立も成り國民教育を完全に施すことを得らるゝであろう、完全なる教育を受けて卒業した兒童は青年會に於て處生に必要なる實業上の經驗を遂げさせ、斯くして兵役の義務を遂行した曉に父祖の家業を相續する場合に至れば産業組合員に加入する即ち一歩は一歩よりも向上して始めて町村の發達人生の安寧幸福を進むることが出來るであらうと思ひます、もつと詳細に御話致したいのですが、今晩は最早深更に至りましたから私の御話は是にて止め置きますでございます。

明治四十一年三月二十六日印刷
明治四十一年三月三十一日發行

農商務省農務局

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷者　守岡　功

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所　株式會社國光社

産
172

IH8X28